

3-0 何が主語になれるか？

どのような英語の名詞でも文の主語になることができるかという、そうではありません。ある種の制約があるのです。1つは「定性」に関するもの、もう1つは名詞の意味内容に関するものです。定性については、実は第1章(☞1-3-2)ですでにふれました。そこでは、不定冠詞(a/an, some)の付いた名詞句を不定名詞句、定冠詞(the)の付いた名詞句を定名詞と呼ぶと述べています。不定名詞句か定名詞かということを「定性」と言います。そのときは定性という用語は使いませんでした。定性の程度によって主語になれるかなれないかということを見てきました。

この章では、名詞の意味内容に関しての制約を見ていきます。たとえば、「人を表す名詞と物を表す名詞が同一の文に現れているときには人を主語にする」など、主語になりやすい名詞、なりにくい名詞という現象が見られます。言語学者によってすでに指摘されていますが、文中に動作主を表す名詞句があれば、それがまず主語になり、動作主を表す名詞句がなければ道具を表す名詞句が、道具を表す名詞句がなければ、被動作主を表す名詞句が主語になるのがふつうであるという、一種の主語になりやすさの階層性(☞3-3)があります。これは基本的には他の言語、たとえば日本語にも当てはまるのですが、日本語と比べて、英語は無生物が主語になる度合いが圧倒的に多いのです。この章ではなぜそうなのかということを考えてみることにします。そうすることで、英語と日本語のモノの考え方、事象のとらえ方の違いがわかります。それはひいては英語力の向上につながるのです。

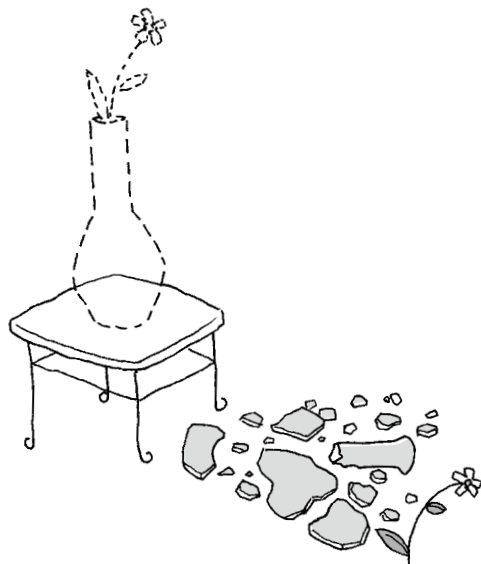
3-1 日本語 vs. 英語

英語と日本語を比較したときに、英語はある行為者が出来事を引き起こすというとらえ方を好む言語であるのに対して、日本語は出来事そのものに注意を払う言語であると、従来から言われています。また、前者のような言語を「する」的な言語、後者のような言語を「なる」的な言語と呼んでいる言語学者もいます。例をあげてみましょう。

- (1) The vase **went** to pieces.
 - a. *花瓶は粉々に行った。
 - b. 花瓶は粉々になった。
- (2) John **went** red with anger.
 - a. *ジョンは怒りで真っ赤に行った。
 - b. ジョンは怒りで真っ赤になった。
- (3) John **came** to life.
 - a. *ジョンは正気に来た。
 - b. ジョンは正気づいた。
- (4) John's dream **came** true.
 - a. *ジョンの夢は真実にやって来た。
 - b. ジョンの夢は真実になった [実現した]。

英語では、go や come などの基本的な運動の動詞が、本来の「場所の変化」を指す場合から「状態の変化」を表すのによく転用されます。上の例では、日本語では「行く」「来る」を使って a. のように直訳することはできません。b. のように「～になる」という訳にすれば容認される日本語になります。

このような日英語の違いを踏まえていきますと、英語にはいわゆる「無生物主語構文」というものがあることに気がつきます。しかしながら、この用語は日本の文法書では見かけることがよくありますが、英米の文法書ではほとんど見かけることがありません。つまり、**私たち日本人が英語の中で無生物主語構文と呼んでいる構文を、英語を母語とする人々はそのようには意識していないのです。**



The vase went to pieces.

3-2 日本語には無生物主語構文はない？

では、英語を母語とする人々が意識することのない、いわゆる無生物主語構文の英語の事例と、それに対応する日本語の例を比較しながら見ていきましょう。

- (1) a. **This medicine** will make you feel better.
b. **If you take this medicine**, you will feel better.
- (2) a. **A few minutes' walk** brought us to this park.
b. **After a few minutes' walk**, we came to this park.
- (3) a. **The bad weather** prevented them from leaving.
b. They couldn't leave **because of the bad weather**.
- (4) a. **This song** reminds me of my childhood.
b. **When I hear this song**, I am reminded of my childhood.

これらの例文は、無生物主語構文の例として日本の英文法書でよくあげられているものです。**無生物主語が、意味上では副詞句または副詞節の働きをしていることが、それぞれの a. および、それをパラフレーズした b. を比べてみればわかります。**これらの英文に対応する日本語は次のように書けるでしょう。

- (1) a. この薬はあなたに気分をよく感じさせるでしょう。
b. この薬を飲めば、あなたは気分がよくなるでしょう。
- (2) a. 数分の歩きが私たちをこの公園に連れてきた。
b. 数分歩くと、私たちはこの公園に着いた。